

詩を読む

詩とは何か／授業の目標

「詩を読む」の目標

- ・論文に沿って詩を読む
- ・詩・論文を適切に理解する

「詩を読む」・・・

そもそも

詩ってなに？

「詩」とは何か。

さくらを見て美しいと感じる人は多くいます。

しかし、今日、その人が感じたように美しいと感じた人はいないのです。

詩とはその絶対に代わりのない、本当の意味で固有の経験の意味をとらえなおそうとすることにほかなりません。

ですが、多くの人は、それを試みようとはしないのです。今日、さくらが見られたのだから、明日も見られるだろうし、明日も美しいと感じると思っているのです。

「詩」とは何か。

萩原朔太郎「竹」

室生犀星「蟬頃」

高村光太郎「樹下の二人」

宮沢賢治「永訣の朝」

吉野弘「I was born」

今回扱う詩は・・・

宮沢賢治
「永訣の朝」

今回のゴール

- 論文に沿って詩を読む
- 詩・論文を適切に理解する

高村光太郎「狂奔する牛」について

狂奔する牛

ああ、あなたがそんなにおびえるのは
今、あれを見たのですね。
まるで通り魔のやうに、
この深山のまきの林をとろろかして、
この深い寂寥の境にあんな雪崩をまき起して、
今はおもひこかへ往つてしまつた
あの狂奔する牛の群を。

今日はもう止しませう、
書きかけてゐたあの樫の三角の屋根に
もうテルヴェルトの雲が出ました
檜の水を溶かして来る
あのセルリヤンの梓川に
もう山山がかぶさりました。
谷の白樺が遠く風になびいてゐます。
今日はもう、画くのを止して
この人跡たえた神苑をけがさぬほどに
又好きな焚火をさせよう。
天然がきれいに掃き清めたこの苔の上に
あなたもしづかにおすわりなさい。
あなたがそんなにおびえるのは
もつと過ける牝牛の群を追ひかけて
ものおそろしくも思せき切つた、
血まみれの、若い、あの愛嬌した牝牛をみたからです。
けれどこの神神しい山土に見たあの驚愕な獣性を
いつかはあなたもはれと思ふ時が来るでせう。
もつとあぐくの事をこの前を知つて、
いつかは静かな愛にほろみながら――

「高村光太郎における動物表象」

――自己と他者との相克をめぐる――

鳥居 万由美

光太郎の動物詩を自己と他者との問題系から見た時、およそ三種類に分けることが出来る。(一)動物を理想像としたもの(二)動物を被抑圧者としてみたもの(三)動物の他性と向き合うもの、である。尚この三要素の幾つかを兼ね備えた詩もある。

(中略)

このように(一)と(二)のタイプでは、自己と、その他者である俗世間を神聖／俗に分割し、倫理的な正当性は前者にのみもつぱら付与されている。自己／他者の対立は、光太郎が理想とする「自然」の力を体現する動物と、卑俗な人間界という、動物／人間の対立構造と重ねられる。

しかし、光太郎には(三)動物の他性と向き合う詩もあった。そこでは二項対立に回収できない、複雑な自己と他者の葛藤を省察する姿勢が見られ、自然概念、そしてそれを体現する物としての動物性は、むしろ自他の差異をそのままに、両者を融和的に包摂するものとして働いている。……

鳥居万由美「高村光太郎における動物表象――自己と他者との相克をめぐる――」(『言語情報科学』第十四号 二〇七―二四頁 二〇一六年)

【解説】(メンバー：吉田、中澤)

「狂奔する牛」は、『智恵子抄』において「樹下の二人」の直後に配置されている詩である。

鳥居の動物詩の分類に従うならば、この詩は(一)動物を理想像としたものとして考えられる。そして、鳥居によれば理想的な「自然」の力を体現する動物は、自己／他者の区分において自己に相当する。

鳥居の論を踏まえると、「狂奔する牛」における「牛」は、語り手である自己(＝高村)の隠喩であると考えられる。この詩を書いた頃、高村が貧窮しながらも芸術活動に打ち込んでいたことを考えるならば、「ものおそろしくも思せき切つた」「血まみれ」の姿は、そうした高村の姿を表していると言える。さらにそうした「露骨な獣性」の牛は「神々しい山土」に在ると表現することで、牛＝高村に芸術活動に専念するものとしての聖性を付与している。

また、この詩にはあなた(＝智恵子)がその牛の姿におびえる描写があるが、詩の傍線部からは、そうした牛(＝高村)の姿を智恵子に受け入れてほしいと願う高村の思いを読むことが出来る。